

て、俊寛は、神祇不拝論、仏法支持者であることは明らかだが、念仏、聖道のいずれの立場かははっきりしない。言わば、博学の解説者という処（博学という点は延慶本と一致）である。彼は、後に「詞はかりはいひちらしたりけれども法花をよみ己身を観する事もなく日吉詣もせさりけり」と記されているので、実践を伴わない、単なる衒学者として批判されてもいるようだ。神祇を否定された康頼は、その論に「甘心」しながらも、神祇を「もつて離へきにあらす」と反論する。それは「尺尊入滅の後二千よ年天竺をさる事数万里」という現実があるからである。また、日本は往古から「神國」として、「神明」によって「佛法」も「王法」も栄えて来た。「神明」がなければこの国の者は「佛法」に縁を結ぶことも出来ないのだと言って、康頼は成経を伴って、「精進潔斎してくまのまうとと准て岩殿へ」出かけるのである。康頼は、堂々と支持論を披露しているが、その論は実者神も崇敬してよいという立場を示しているのかも知れない。源平盛衰記は、「平家物語」諸本の中で最も多く熊野関係記事を有つのであるが、こうして見ると、その編著者に神祇支持者がいたことは確かであり、更には熊野信仰者がいたと考えるも宜さそうである。

#### 四

最後に、本稿の中で注記して来た諸本の関係だが、全体としては区々であるという外はない。<sup>(注八)</sup>これは、興味ある譚ごとに採用され、他本にない特色を出そうとしたことの反映ではあるまいか。

しかし、いくらか顕著と見えることもあるので、次に、そうした問題について記したい（但し、顕著とはいっても、当道系と非当道系の違い、一方流と八坂流の違い、延慶本、長門本、源平盛衰記の一致、延慶本、長門本の一致は周知のことなので、そのようなものは省略し

た）。

建礼門院の御産に当たつての祈願関係記事、高倉上皇の二度目の嚴嶋御幸記事では中院本、八坂本が他本と異なつた表現をとっている。中院本と八坂本がこれだけで一派をなしていることは割合多く見られたが、非当道系諸本と縁が薄い訳でもない。白鳥明神や、三嶋明神が清盛を討つという夢などの記事は逆に延慶本、長門本、源平盛衰記といった諸本に一致している。

四部合戦状態は、御産の時神馬を引いた神社数や頼朝が祈願したところを洲明神とする点で源平盛衰記に一致している。しかし、非当道系諸本の中では、成親の祈願で三室戸法印を記さない等、長門本と共通する傾向も多く、個々の譚毎に関係は異なつていふと考える外ない。当道系諸本との一致は、成親の賀茂への七夜参籠や経正の竹生嶋参詣など、やはり源平盛衰記が最も多いようだ。

(注一) 引用等とくに断つていないものは延慶本の表現である。猶、当道系諸本の場合は屋代本、その他の場合は最初に記される本の表現を用いている。

(注二) 祭神名も注一の方針で記した。

(注三) 後述、参照。

(注四) 神社、神祇名も注一の方針で記した。

(注五) 平家と熊野との関係は拙稿「『平家物語』に描かれた熊野」(『人文』平成五年三月)に纏めている。

(注六) 頼朝の旗揚げ以前のことは拙稿「源頼朝の旗揚げをめぐる」(『人文』平成二年三月)で詳しく論じている。

(注七) 注五の拙稿参照。

(注八) このように思われることも何度か述べて来た。

(一九九三年七月一八日受理)

ハ貧道ノ身ニテ心ハ大憊慢ノ心」となっていたと反省していた。それに注目すれば、延慶本のこの譚の趣旨は、「懺悔ハ吉ク滅罪ノ法」であること、「後生菩提」の為に祈ることの必要を論じたものと言えよう。神祇に「今生ノ榮花息災延命」を祈願するのではなく、「後生菩提」を祈るべきだという延慶本の主張は、後の源平盛衰記の論に近い処も感じられるが、「懺悔」の尾をずっと引いている点で異なる。

後者は長門本の俊寛の言葉に近い。異なるのは、日吉社ならという意味合いがあるかないかだけである。

俊寛は次いで、「後生菩提」を祈るのなら、「念仏讀經」すれば充分ではないかと言ひ、「神ヲ神ト信スレハ邪道ノ報ヲ受テ永ク出離ノ期ヲ不知」という先人の言葉を示す。「神」については、すぐ後の所で「迷ノ心」とも言っている。このように、延慶本の俊寛は、神祇よりも「念仏讀經」を重んじるが、しかし、彼は浄土宗はよく分からないと言う。そして、「一心」に全てが帰するという法論(康頼は「花厳宗ノ法界唯一心力」と言う)を展開する(この法論は、源平盛衰記で聖道について俊寛が述べる意見に近い)。ところが、それから更に、禪に論及して行つて、これを「言語道断ノ妙理」と評価し、その禪から見れば、「熊野権現ト申モ夷三郎殿ト申モ虚心虚妄ノ幻化」に過ぎないと否定して、長い俊寛の神祇否定論は終わることになっている。

俊寛の禪に対して、康頼は、禪は「迦葉一人ノ所證」があるに過ぎない「外道ノ法門」だと決め付け、今の俊寛は「末世ノ提婆達多」だと批判する。そして、自分は「鈍根無智」なので、「真言教ニハ加持ノ即身成仏浄土宗ニハ他力ノ往生」を信じていると述べ、従つて、「三所権現モ外ニマシマス」と、あつさり俊寛の「虚心虚妄ノ幻化」論をかわして、熊野参詣に出かけることになっている。博学な「禪ノ法門」者俊寛に対して、康頼は素朴な「鈍根無智」の者という立場をとったのだが、しかし、ここで康頼が神祇信仰を是とした論拠は、世間で信

じられているからという以上のことはない。

延慶本の康頼と俊寛の論争を、本文に即して具体的に詳しく見て来たが、最後に、源平盛衰記の同じ場面を見て、この節を終えることにしよう。

先述のように「エヒス三郎」という神祇は「神名帳」に見えないという所までは共通する(源平盛衰記がやや詳しい)ので、その後の俊寛の言葉からである。

さて、俊寛は、「岩殿」で「熊野参詣の宿願」を果たそうという誘いを断る。その理由は「後生ほたい」のためならば「弥陀念佛をも唱へ」きだ(延慶本にもある)し、「都かへりの祈り」ならば法華經を読むべきであるからという。前者は、そのまま經文に証があるし、後者は「遠流」の身の有様は「病」と見做せるのではないかと、その根拠も示す。次ぎに、俊寛は神祇について論じ、権者神というのは「佛菩薩の化現」であり、実者神というのは「悪霊死霊等のあらはれ出て衆生に崇をなす者」だと分類し、実者神を敬すると「永劫悪趣にしつむ」と言つて、その証文(『優婆夷經』)と中国の「靈驗無双の杜」の「神躰」を打ち砕いて捨てた譚とをするのである。俊寛によれば、「岩殿」は実者神に外ならないのであろう。猶、俊寛による神祇の分類は親鸞門流の談義本『神本地之事』(応永二十年書写)で述べられていることに近いようだ。

俊寛は、次に、権者神も垂跡に過ぎないから、本地仏に直接就くべきだとこれも否定する。そして、今度は仏教を大きく念仏と聖道に分ける。前者を採るならば、常に「口に名号を唱へ心に極樂をねん」じるべきだし、後者を採るならば、「己身」を觀じ、「自身の宝藏」を開くべきだと、滔々と論じ、最後に、「仏法を修行」すべきだと結論する。先述のように、後者、「己身」を觀ずることが肝要と解説する部分は、延慶本にも同趣旨の文章を見出せるが、表現は大きく異なる。さ

「平家物語」に神祇信仰の是非が論じられる場面がある。源平盛衰記、延慶本で、康頼、成経が硫黄島に熊野権現を祭り、俊寛はそれに同道しなかったところがそれである。

しかし、当道系諸本や長門本は全く神祇信仰論争にまで及ばない。屋代本は、「俊寛ハ不用之」と一番素っ気ない。覚一本はこれに「天性不信第一の人にて」と添える。天下の法勝寺の執行が「天性不信第一の人」とは、俊寛の人間像などという面から興味深い、これでは神祇信仰の是非に発展しようもない。中院本、八坂本は「もとさんそうなりけるうへふしんの人にて」と、宗派の違いを加味している。この中院本、八坂本の「さんそう」だから日吉社は良いが熊野社は否だという俊寛の態度は、長門本、源平盛衰記にも記されている。源平盛衰記の場合は、神祇信仰の是非論の中に全く異質な個人的理由が挿み込まれているという風であるが、長門本では、日吉社へはどこへも参詣しなかったのに、硫黄が島へ流罪になって「かなしさのあまりによしなきもろくの岩のかとをくまのこんけんとあかめておかみありきたり」と言つて都の人に笑われるのが恥ずかしいと述べて、日吉社なら良いが、熊野社は否だと言つて断るという風に、この間の事情だけが詳しく記されている。俊寛が日吉社に参詣しなかったのが、「天性不信第一の人」ということによるのか、神祇不拝という立場からなのかは不明であるが、外聞が悪いと個人的恥ずかしさから参加しなかったというのは、これはこれで立派な理由となっている。それにしても、長門本も神祇信仰の是非論には殆ど触れない。さて、源平盛衰記と延慶本の神祇信仰の是非論に移ろう。論としては、源平盛衰記が本格的だが、共通する文章から（延慶本はこれ以前にも神祇信仰を冷笑した場

面がある）見て行くことにする。

話は「エヒス三郎」という神を島民が祭っていたことから始まる。康頼は「エヒス三郎」の存在に肯定的である。彼は言う、「炎魔王界」という猛火の中の「鬼ノ住所」にも「十牀ノ神床」を並べて、十神が住んでいると聞く。硫黄島も「扶桑神國ノ類鳴」だから「エヒス三郎」も住んでいるに違いないと。そして、康頼は、宿願の三十三度の熊野参詣の残り十五度を「後生善所ノ為」にその「岩殿」で果たそう（源平盛衰記は「都かへり」も加える）と言つて、同行を呼びかける。彼が「岩殿」を選んだのは、神祇は「嘸請の砌」に顕現するので、熊野権現の納受を得られると考えたからである。

これに対する俊寛の返事のすぐ後から源平盛衰記と延慶本は別々の論を展開して行くことになる。

日本は「神國」と言つて「神名帳」に神の名が記されているが、その中に「エヒス三郎」の名はない、と俊寛が言うところまでは共通する。その後の論争の展開を、まず延慶本から見て行こう。

俊寛は「神名帳」に見えないと断定した後、「エヒス三郎」を「巫女ニ付タル有サマ云甲斐ナキ者」と評する。この「エヒス三郎」が鹿児島に多い蛭子神社と関わるのか、沖繩の「ノロ」と関わるのか、興味深い。しかし、俊寛の言おうとすることは「ヤハヤ尋常ハカ／＼シキ利生モ候ハンスル」ということである。康頼の話では、熊野に十八回参詣しても、一回も参詣しない成経や俊寛と「同罪同所ノ身」となっている、又、法勝寺の執行が「セメテノ事」に「エヒス三郎」に参詣しているよと、都の者に言われるのも恥ずかしいと言つて、俊寛は同行を断るのである。この言葉の前者は神祇信仰の問題に関わっている。俊寛は、康頼の十八回の熊野詣でが為すところがないことを以て無意味と決め付けているが、康頼は、源平盛衰記との共通文以前の所で、「今生ノ栄花息災延命」の為、つまり「名聞ノタメ」だけに参詣し、「身

を読んだこと(当道系諸本には無い)などがある。

平家では、先ず清盛に、「アニノ宮御神拝」の折、連歌の下句を見る習わしがあると聞いて、神拝を中断して上洛し、登蓮に付句をきいてから取って返し、神拝を遂げたという出世譚がある(延慶本のみにある)。安徳天皇の誕生については、清盛夫妻が最初は「日吉社二百日ノ日詣」をしても効果がなかった(覚一本には無い)ので、厳嶋に月詣でを始めて、三月の内に懐妊となったという。長門本には、この御産の時不吉な落書をしたと疑われて逮捕された「哥人文者」が、重盛の計らいで北野天神に起請文を書くことで済まされたという譚まで付いている。

有名な重盛の熊野詣では、頼朝の願いを聴き入れて浄海入道を討つたという夢を見た(長門本、四部合戦状本、屋代本には無い。猶、覚一本は「悪行超過し給へるに由て」とする)ので、熊野権現に「入道ノ悪心ヲ和テ天下ノ安全ヲ得」させる(長門本、四部合戦状本には無い)か、「重盛カ今生ノ運命ヲ縮テ来世ノ苦輪ヲ助」ける(長門本には無い)かを祈願する為であった。その子惟盛の熊野詣では、父重盛の参詣を偲び、自身の「往生」と「古里ニ残シ留シ妻子安穩」を祈願する三山巡りとなっている。<sup>(注五)</sup>

都落ちした後の平家一門は土地土地の神祇に「舊都還幸」を祈願したと見られるが、その一つに宇佐詣である。この時は七日参籠した(但し、当道系諸本には目的が明記されていない)ということだが、その間の様子は「拝殿ハ主上女院ノ皇居也 廻廊ハ月卿雲客ノ居所トナル 大鳥居ハ五位六位ノ官人等固タリ 庭上ニハ四國九國ノ兵ノ甲冑ヲヨロヒ弓箭ヲ帶シテ並居タリ」と描かれている(居場所が屋代本、覚一本、八坂本で少し異なる。四部合戦状本は欠巻)。延慶本、長門本、源平盛衰記では神馬も引かれている。

源氏の関係で、先ず頼朝だが、彼の雌伏期では心中で願を立てると

いうことが印象的だ。伊東祐親の許から逃れる時、八幡大菩薩に祈念したこと(延慶本、源平盛衰記にある)がそうだし、文覚の勧めを最初聞く時も「南無八幡大菩薩伊豆管根両所権現」と心中で祈っている(延慶本、長門本、四部合戦状本にある)。<sup>(注六)</sup> 頼朝の参拝記事として最初のもものは「安房國安戸大明神ニ参詣シテ千反ノ礼拝ヲ奉テ 源ハ同流ソ石清水セキアケ給ヘ雲ノ上マテ」の歌を奉納したということである(当道系諸本には無い)。又、延慶本、長門本、源平盛衰記にある頼朝からの「奏聞条々」の中には、神領の安堵や追加、社屋の保全、恒例の神事の勤行が記されている。注記したように、頼朝の神社、神祇との関わりは、延慶本を中心にした非当道系諸本に記されているという特徴がある。

頼朝の叔父行家は三河の国府から伊勢大神宮に願書を奉じている(延慶本、長門本、源平盛衰記にある)。源平盛衰記はこの時、「神馬三正銀劔一振上矢二筋」を添えたとする。源氏の願書としては、義仲が大夫房覚明に書かせて、填生新八幡に奉納したものが有名である。これは「且ハ後代ノ為且ハ當時ノ祈ノ為」に書かれたもので、「十三騎ノ表矢」と一緒に奉納された。延慶本、長門本、源平盛衰記には、外に、白山へ奉納した願書も記されている。義仲は合戦の前後によく神社、神祇を拝している。初戦、横田川原の合戦の前には楯親忠が、八幡宮に「木曾殿勝給ハ、十六人ノ八人女八人ノ神子男所領寄進セム」と祈り、義仲も火が及ばぬ内に駆け付けて願書を奉じている(延慶本、長門本、源平盛衰記にある)。俱利伽羅谷に遠征軍を亡ぼした後は白山金劔宮に向かって「鞍置馬廿疋ニ手縄結テ打カケ」て進め、横江庄を白山に寄進したという(延慶本、長門本、源平盛衰記にある)。覚一本は、この時秀衡から贈られた駿馬二頭に鏡鞍を置いて白山へ神馬として立てたとし、これとは別に志保を敗った後にも、白山、菅生、多田八幡、気比、平泉寺に神領、寺領を寄進したことが記されている。

行われている(延慶本、長門本にある)。高倉上皇のこの時の嚴嶋詣では父法皇の軟禁を解くことが主であった様だが、上皇は、六箇月後に再度、「天下静謐ノ御祈念」「聖躰不豫ノ御祈禱」の為に嚴嶋詣で行っている(中院本、八坂本には無い。源平盛衰記、四部合戦状本は「御賽」とする)。この時、上皇は「素紙墨字ノ法花經ヲ書供養」された(延慶本、長門本、屋代本にある)外、自ら「金泥ニテ提婆品ヲアソハサレ」(延慶本、長門本にある)、願文を奉納されている(中院本、八坂本を除く諸本にある)。その外、源平盛衰記では「神馬神宝」を捧げたことも記されている。

右のような天皇や上皇の行為の周辺と見えようが、幼主安德天皇の為に国母建礼門院が東に向かつて、「南無伊勢大神宮正八幡宮御毗々比テ天子寶算千秋万歳」と祈っていたことも記されている(延慶本、源平盛衰記、四部合戦状本、覚一本にある)。又、安德天皇の入水の時、延慶本では二位尼時子が天照大神・正八幡宮に「引接」を祈ったとするが、覚一本や八坂本では時子の勧めで天皇が伊勢太神宮に暇を述べることになっている(他本は伊勢に言及しない)。先述の建春門院の熊野詣では「先年不例ノ時御願ヲ果ムトテ御歩行ニテ」行われたという。建礼門院の御産の日の御願が出来たが、このような御願は平癒の後、必ず果たされるべきものであった。

次に、貴族の種々な関わり方を見てみることにしよう。

大將に就任したいと願った成親は、先ず「或僧ヲ八幡ニ籠テ真讀ノ大般若ヲ讀セ」ている(覚一本は百人の僧に七日とする)。その一方で「賀茂ノ上社ニ七ケ日鴨御祖社ニ七ケ日忍テ歩行ノ日詣ヲシテ百度」を踏もうとした(四部合戦状本は百日詣、源平盛衰記、屋代本、覚一本、中院本、八坂本は七夜詣(参籠)とする)。更に「上ノ社ニ八仁和寺俊堯法印ヲ籠テ真言秘法ヲ」、「下若宮ニハ三玉戸法印ヲ籠テ吒枳尼天ヲ」行つた(四部合戦状本や長門本は「上ノ社」の件だけを記す。当道系

諸本も一件だが、僧名は記さず、社の表現などは区々である)。源平盛衰記は、右に記した八幡、賀茂での祈願以前に、自ら春日に七日籠もつて祈誓したことも記している。成親の祈願は、これでもかこれでもかと手を変えて行われるが、延慶本と源平盛衰記がその極北を描いていることになる。

康頼と成経の熊野詣では、「岩殿」等を熊野に擬えることによって成される。それは只管な信仰心の世界であるといえよう。この殆どが空想の世界の中で、法衆だけは力を尽くして演じられた。「奉幣御神樂ナムトノ事コソ叶ハストモ」「ナレコ舞計ハ心ノ及フ程ニ仕ヘシ」というのが康頼の心であり(延慶本、長門本にある。但し、長門本は表現をかなり異にする)、三十三度の結願の日には「神祇ノ巻ノ今様」を「聖照力第一ノ能」として歌っている(延慶本だけにある)。「今様」を歌ったことは覚一本では、康頼が夢に「龍神の化現」を見た夜のこととして記しているが、源平盛衰記はその同じ夜を「哥をうたひ其終りに足柄をうた」つたとする。

康頼達の熊野詣でで有名なものは「祭文」(祝詞)であるが、それを読む康頼の作法を延慶本は「浦ノハマユフ御幣ニハサミ山スケト云草ヲシテニタレテ清キ砂ヲ金ノ散供トシ御前ニス、ミ出テ左ノ膝ヲタテ足ヲ片敷テ」と描いている(延慶本、源平盛衰記にある。当道系諸本は「御幣紙モナケレハ花ヲ手折テ捧ケツ、」とする)。

法衆としては琵琶が多く、師長が熱田の社で、経正が竹生嶋で(源平盛衰記や当道系諸本にある)弾じた譚がある。

次に、僧侶が行つたものに、「犯大伯昂星」という天変のあった後、「前権少僧都顯真貴賤上下ヲ勸メテ日吉社ニテ如法經一万部轉讀」したことが記されている。この時は後白河法皇の御幸もあった。僧侶を神社に籠もらせて祈禱させた例は、既に成親の祈願の条に出ていたが、その外に、頼朝に頼まれた律浄房が「八幡二千日籠テ無言ノ大般若」

- 15 合奏 琵琶(住吉、管絃)
- 16 降雨 日吉(師長、琵琶)
- 17 人 童兒(春日↓基通)、老翁(春日↓基通)

充分に整理出来ないが、一応筆者の調べたところでは右のようになる。夢による知らせというものは他にもあるが、果たして神祇の御示現なのか不明なものも多く、そうしたものは省いてある。

最も多くの形で応諾を示しているのは熊野で、七つを数える。八幡の鳩のように決まっているものが一方にあるのに、この現象はどう捉えるべきなのか。成親が八幡で大将祈願をさせた時には、「山鳩二来テ食合テ死ニケリ」という形で八幡の意向が一応示されているが、これは別当から公家に報告されて、神祇官で御占が行なわれている。おそらく正式には、御告げとして確認される証拠を要したと考えられるが、「平家物語」は事の成り行きが証拠となつてゐる面があるので、多様な伝承がそのまま受け入れられているのであろう。この点から見れば、熊野は多様なお告げが示されている分、物語の筋に関わり、かつ、神として活動期にあることを示していると言えよう。

## 二

前節に記して来た神社、神祇の靈驗譚と深い関係を有つのであるが、この時代の人の神社、神祇との関わり具合を次に見てみたい。

まず、「平家物語」に描かれた朝廷の神社との関わりから見て行くことにしよう。

朝廷の行事で神社との関わりが最も賑やかに記されているのは、建礼門院の御産の時である。懷妊ということが判る前、建礼門院の気分が勝れなくなると、早速、「諸宮諸社ニ奉幣使」が立てられている(源平盛衰記、四部合戦状本には無い)。その後懷妊ということが判つて、

いよいよその御産の日は女院自身「八幡賀茂日吉春日北野平野大原野ナムトへ行啓有ヘキ由」の御願を立てている(中院本、八坂本にはない)。猶、神社の数などに多少の異同がある)。又、中院本、八坂本以外では「石清水賀茂ヲ始奉テ北野平野稻荷祇園今西宮東光寺ニ至マテ四十一ヶ所」で「御讀經」が行われている(猶、覚一本は「太神宮を始め奉て廿餘ヶ所」とする)。一方、中院本、八坂本は「いせいはしみづをはじめ奉りて廿二しやくわんべいあり」とする。これとは別に、更に「大神宮石清水ヲ初奉テ嚴嶋ニ至マテ廿三社」(神社名については、屋代本、覚一本に石清水が無く、中院本、八坂本は「賀茂をはじめ奉りて」と異なる。社数については、屋代本には記載がなく、長門本二十五、源平盛衰記と四部合戦状本が八、覚一本が七十余ヶ所と一層区々である)に神馬も引かれている。

春宮立ち、踐祚には神社、神祇に関する記事は無い。在位中のものとしては、高倉天皇が、父後白河法皇が鳥羽殿に幽閉された日から毎夜「清涼殿ノ石灰ノ壇ニテ大神宮ヲ拝シ」続けたという記事がある。安徳天皇の時代、治承四(一一八〇)年十二月一日「兵乱ノ御祈」に嚴嶋に奉幣使が立てられている(延慶本、長門本にある)。翌養和元年十月にも「日吉社ニテ謀叛ノ輩為調伏ノ五壇ノ法ヲ」行い(八坂本は三井寺とする)、「神祇官ニテ神饗例幣ヲ廿二社被立」(四部合戦状本、八坂本には無い。又、覚一本は「飢饉疾疫によつて」とする)、「鐵ノ御甲胃ヲ大神宮へ被獻」た。「鐵ノ御甲胃」は将門追討の御祈りに做つたものとのことであつた。

退位した後、「諸社ノ御幸初二ハ八幡賀茂春日平野ナドへ御幸有テコソ何ノ社ヘモ御幸アレ」と言う意見もあるそうだが、白河上皇は熊野、後白河上皇は日吉、高倉上皇は嚴嶋と、少なくとも院政期は心々に参詣されていると見られる。高倉上皇の場合、一日逗留して、法花会を行い、舞樂などを演じている。法樂の舞樂は建春門院の熊野詣でも

18 竹生嶋（源平盛衰記、当道系諸本にある） 経正竹生島詣で

19 白山（当道系諸本にある） 神輿渡御

20 日光、宇津宮（四部合戦状本には無い）、那須（源平盛衰記、覚一本、中院本、八坂本にある） 与一扇を射る

21 アニ（延慶本のみにある） 登蓮扶持

22 エヒス三郎（同前） 鬼界島蛮力岳

23 北野（源平盛衰記のみにある） 平家安楽寺詣で

諸本によって異なるが、右に挙げた外にも、八幡は律浄房の千日参籠など、日吉は頼朝調状など、熊野は重盛参詣など、住吉は後白河法皇対面など、春日は土佐房昌春、厳嶋は清盛の崇敬由来、宇佐は経正法楽といった霊験譚があつて、複数の霊験譚を有する神社、神祇も少くない。

これを現在時以前の霊験譚を有つ神社、神祇と比べてみよう。先ず第一に気付くことは熱田、伊勢、春日、日吉、住吉、三嶋、宇佐、北野、一言主、竹生嶋と、共通する神社、神祇の多いことである。これらは、現在時以前の霊験譚を有つ神社、神祇の半数に上るが、皇室や藤原氏に關係するものが目立つ。

現在時以前の霊験譚を有つ神社、神祇で共通しないもの（二本以上にあるもので）は、白鳥、伊吹、杵築、布流、「松浦・鏡」、「姫嶽・高千尾」、諏方、蔵王、稻荷、富士である。これらのうち、白鳥、伊吹、杵築、布流は神話時代の譚と言つてよく、「松浦・鏡」と「姫嶽・高千尾」は九州のもの、諏方、富士は関東に近い地域と、共通しないものの殆んどは特殊な譚という面がある。

同様に現在時の霊験譚を有つ神社、神祇で共通しないものは、八幡、賀茂、厳嶋、宮路山水神、塙生新八幡、「安戸・す」、金劔、白山、貴船、田邊新宮、日光、宇津宮、那須である。八幡、賀茂、厳嶋という「平家物語」によく出て来る神社、神祇の霊験譚が現在時のものだけと

「平家物語」諸本に描かれた中世の神社、神祇をめぐって（橋口）

いうことにはびっくりする。塙生新八幡、金劔、白山は義仲と關係があり、「安戸・す」、貴船、日光、宇津宮、那須は関東の源氏と關係がある。先述の八幡は源氏に、厳嶋は平氏に深い関わりをもっていることも合わせれば、やはり共通しない霊験譚の殆んどは、源氏、平氏の時代を辿り、戦いを描く中で記されていることになる。

さて、神社、神祇の霊験譚について、現在時以前と現在時に分けて見て来たが、神祇の意向はどのような形で示されているであろうか。

現在時（厳密ではない）のものについて、次に整理して示してみよう。

1 和歌 文字が見えて来るもの（熊野↓康頼、成経）、耳に聞こえるもの（春日↓基通）、夢中で詠じられるもの（賀茂↓成親）、歌に応じて示されるもの（安戸↓頼朝）など

2 夢 予言（清盛の死）、単なる失火でないことを示すもの（内裏焼失）など

3 自然の突然の変化 動↓静（那須与一）、静↓動（康頼の法楽の今様）、氣候の劇変（白山神輿登山）など

4 宝殿の震動 琵琶（師長）、付句（登蓮）など

5 イ死（勤行者）——拒否 覚算（日吉）、大中臣定隆（伊勢）

口死（侵犯者）——神罰 昌春（春日）、金光五郎（白山）

6 託宣 巫女（アニ）、内侍（厳嶋）など

7 鳥 鳩（八幡）、雁（熊野↓康頼、成経）、鶏（熊野↓堪増）

8 怪異 鬼神（水神↓師長）、白狐（竹生嶋↓経正）

9 火災 金劔、一言主

10 落雷 賀茂下若宮

11 到着（卒都婆） 熊野（新宮）、厳嶋

12 鎬矢 住吉

13 魚 鱸（熊野）

14 昆虫 蜘蛛（熊野↓康頼）

し方である)

藤原広嗣の乱

- 4 姫嶽・高千尾 (延慶本、長門本には神名の記載が無い。源平盛衰記は姫嶽とし、屋代本、覚一本は高千尾とする。中院本、八坂本は二つの名があったと話す)

緒方伊栄の先祖

- 5 伊勢、住吉、諏方

神功皇后の新羅討伐

- 6 蔵王

日藏の六道廻り

- 7 三嶋 (延慶本、長門本、源平盛衰記にある)

能因の雨乞い

- 8 日吉大宮 (延慶本、源平盛衰記にある)、二宮 (同前)、住吉 (同前)、十禅師 (延慶本のみにある) 日吉山王縁起

- 9 山王、十禅師 (延慶本、長門本、四部合戦状本にある)、大宮 (四部合戦状本のみにある)、二宮 (同前)

- 10 いなり (長門本、源平盛衰記にある) 山王効験

- 11 宇佐八幡 (延慶本、四部合戦状本にある) 上玄石上

- 12 北野 (延慶本、源平盛衰記にある)、比良 (延慶本のみにある) 弓削道鏡

- 13 一言主 (延慶本、長門本にある)、富士 (同前) 北野天神の靈験譚

- 14 竹生嶋 (延慶本、源平盛衰記にある) 都良香竹生島詣で

- 15 丹生 (延慶本のみにある) 粉河寺縁起

- 16 塩かま (源平盛衰記のみにある)、笠嶋道祖神 (同前) 藤原実方奥州下向

物語の現在時以前の靈験譚が記されている神社、神祇は右の通りであるが、中には僅かながら右に記した靈験譚以外にも靈験譚を有つものがある。

神社、神祇の地域的な偏りについて、近畿地方が多いのは当然だが、九州に関係のある神社、神祇がそれに次ぐ数となっている。「松浦・鏡」、「姫嶽・高千尾」ともに諸本で名称が区々なのは、やはり地域との関わり方 (情報) の違いを反映しているのであろう。又、広嗣と道

真は先述の、名前の記された怨霊的祭神である。

次に現在時の靈験譚が挙げられているのを見てみよう。

- 1 八幡、賀茂

成親の大将祈願

- 2 日吉山王

内裏焼失

- 3 熊野 (四部合戦状本は欠巻)、厳島 (同前)

康頼、成経の帰洛

- 4 三嶋 (四部合戦状本、屋代本、覚一本には無い)、春日 (覚一本のみにある)、吉備津 (源平盛衰記のみにある) 清盛以下の滅亡

- 5 熱田、宮路山水神 (延慶本、長門本、源平盛衰記にある)

師長の琵琶法楽

- 6 厳嶋、八幡 (源平盛衰記には無い)、春日 (屋代本、中院本、八坂本には無い)、伊勢 (源平盛衰記のみにある)、赤山 (同前)、住吉 (長門本のみにある)、すは (同前)、武内 (覚一本のみにある)

- 7 伊勢、日吉 (八坂本には無い) 雅頼の侍の夢

- 8 墳生新八幡 (屋代本、覚一本は「墳生」を付けない) 源氏追討祈願

- 9 宇佐 (四部合戦状本は欠巻) 平家宇佐詣で

- 10 住吉 平家征伐

- 11 春日 (長門本、四部合戦状本には無い) 摂政落ち留まり

- 12 安戸・す (延慶本、長門本は「安戸」とし、源平盛衰記、四部合戦状本は「す」とする) 頼朝参詣

- 13 一言主 (延慶本、長門本にある) 清盛死去

- 14 金劔 (延慶本、長門本、源平盛衰記にある) 俱利迦羅谷の戦い

- 15 白山 (延慶本、長門本、源平盛衰記にある) 倉光五郎討たれ

- 16 貴船 (延慶本、長門本にある) 義経の白矢

- 17 熊野若一、田邊の新宮、田なべの新熊野 (延慶本は「熊野若一」、長門本、源平盛衰記は「田邊の新宮」、覚一本は「田なべの新熊野」とする) 堪増の占い



# 「平家物語」諸本に描かれた中世の神社、神祇をめぐって

橋 口 晋 作

『徒然草』によれば「行長入道平家物語を作りて生仏といひける盲目に教て語らせ」たのは、「後鳥羽院の御時」ということだが、現存する諸本の奥書等で最も古いものが鎌倉時代末期の延慶年間（一二三〇—一二三九）、当道座を確立したと言われる覚一の証本の成立が南北朝時代の応安四（一三七一）年などと、多様な現存諸本の成立は時間上かなりの幅が考えられている。この「平家物語」が初めて纏められてから、主な伝本が成立したと考えられている期間は、その一方で中世神道が盛んになった時代と重なっている。従って、「平家物語」に目を通してみると、相当数の神社・神祇が記され、諸本間でかなりの異同があることに気付くのである。こうした神社・神祇記事から「平家物語」を眺め、その諸本に迫ってみたいということになるだろうか、というのが筆者の久しい課題であった。本稿は、このような関心から「平家物語」の代表的な諸本に記されている神社・神祇について、全体的な俯瞰を試みたものである。猶、本稿で取り上げた諸本は延慶本、長門本、源平盛衰記、四部合戦状本、屋代本、覚一本、中院本、八坂本の八本である。

## 一

平家物語諸本に出て来る神社、神祇は撰社、分社まで含めると百前後の数に上る。

「平家物語」諸本に描かれた中世の神社、神祇をめぐって（橋口）

神社は、地名または神名に「宮」<sup>(注1)</sup>、「社」を付けて出てくるのが殆んどである（「大神宮」「大社」と格を示す語が付くのは極めて稀である）。神祇は「明神」「大明神」を付けて呼ばれるが、天照大神<sup>(注2)</sup>（伊勢屋代本には無い）、素盞烏尊（杵築・熱田 四部合戦状本、覚一本、中院本、八坂本には無い）、月讀尊（丹生 延慶本のみ）、日本武尊（白鳥・熱田 四部合戦状本、覚一本には無い）、應神天皇（八幡 四部合戦状本には無い）、聖母大多羅知女（香椎 長門本のみにある）、藤原廣嗣（松浦・鏡）<sup>(注3)</sup>、菅原道真（北野天神 延慶本のみ）のように祭神が明示されているものもある。又、社名は記されていないが、元暦元（一一八四）年四月十五日には「崇徳院ヲ神ト崇メ奉」ったことも諸本に記されている。これらの例から見ると、明示されている祭神は、神話に出て来る神々か、政争、合戦に敗れて崇りをなす怨霊かのいずれかに分けられるようだ（勿論、外に剣、鏡といった器物、蛇のような動物が祭神とされるものもある）。

神祇の靈験譚を見てみよう。まず、現在（源平の時代）時以前の靈験譚が挙げられているものを示そう（なるだけ各神祇一箇所とした）。

1 熱田<sup>(注4)</sup> 伊勢（屋代本、覚一本には無い）、白鳥（四部合戦状本、覚一本、中院本、八坂本には無い）、杵築（延慶本、長門本、源平盛衰記にある）、磯上布流（源平盛衰記は「石上」「布流」の二社があるような、書き方である。屋代本もこれに準ずる）、八幡（屋代本のみにある）、住吉（同前）、熊野（同前）、貴船（同前）

一連の靈劍譚

2 日吉八王子（四部合戦状本には無い）、日吉十せんし（長門本、源平盛衰記、四部合戦状本にある）、春日（同前）、兵主（長門本のみにある） 後二条関白師通の死

3 松浦・鏡（長門本、源平盛衰記、四部合戦状本は「松浦」とし、当道系諸本は「松浦の鏡」とする。延慶本は別々の神のような記